

とくいく「禅語」九

徹底（てっぺい）

「徹底」とは、「底まで貫き通ること、隅々まで十分に行き届く」という意味で使われる言葉ですが、もとは仏教の言葉です。仏教（仏典）のなかで「ある比喻」として登場した言葉が今も使われています。

その例え話とは、「ガンジス河のほとりに3匹の動物がいた。兎と馬と象である。3匹はみな河を渡って対岸にたどり着きたいと思っていたが、しかし河に橋はない。そこで3匹は泳いで河を渡ることにした。最初に河に入ったのは兎。兎は短い足で河の水面を小刻みに掻いて向こう岸へ向かって泳いでいった。次に入った馬は兎よりもはるかに長い足で水を深く掻いて進んでいった。最後に河に入った象はどう泳いだかという、足が河底にまで達していたものだから、その太い足で河底をドシン、ドシンと踏みつけて歩いて渡っていった。

つまり、この話は、「物事の理解の浅深を喩えた話」なのです。

兎のように、水面を渡っていくのは、いわば物事の答えだけをただ覚えて、意味はわからないが答えだけは知っているという状態。ただし、本当に知っているとも言い難い。

「徹底という言葉は仏教から生まれた言葉である」とだけ知っていて、もともとの意味については何も知らないというような状態です。

2匹目の馬は、兎よりも理解が深く、なぜその答えになるのか、意味も知っている状態。「徹底という言葉は仏教の比喻で使われていた言葉で、それが現代においても用いられているということを知っている」というような状態。もちろんどのような比喻なのかも知っています。では3匹目の象はというと象の足が河の底にまで到達している。つまりこれは、「物事の奥底にまで自分の考えを及ぼせてその物事を理解している」という状態であるという意味です。

仮に徹底という言葉の意味や成り立ちを知っていたとしても、ただ知っているだけでは情報にすぎません。情報は、その情報について自分の頭で考えることによって、あるいは体験し思索することで、ようやく知識へと昇華するようになります。

兎や馬のように情報を知っているだけでは、本当にそのことを知っているとは言えません。所詮は表面的な理解だからです。一方の象は、自分のこととして理解している状態であるがゆえに理解が深く、これは似ているようで、実際にはかなりの隔たり（差）がある違いです。

情報は体験し考えることによって、自分の生き方に影響を与える重要な知識へと存在意義を変化させます。そこまで物事を理解してこそ、本当に理解しているということになるのだと思います。象のような理解とは、自分の生き方に影響を与えるような理解の在り方を意味しているというわけです。

そのように物事を深く自分のこととして理解することが、徹底という言葉の本当の意味なのです。普通、徹底というと、1つのミスもなく、ぬかりなく行うというニュアンスで使われますが、自分自身でしっかりと考え抜いて行動すると解釈したほうが原意に近いように思います。情報を受け取るだけでなく、自分の頭で考え、心で感じて、そうして始めてその物事について知っているということが云えます。それが本来の「徹底」という言葉の意味なのです。